

第2節 (教材3-2) “I Have a Dream”

—キング牧師の生きざまに学ぶ—

もしもあなたが、1日の勤めを終えてバスに乗り、空いている席に座ってほっとしていた時に、後から乗ってきた人のために立てと強制されたら…。しかも、その理由は肌の色が違うからだと言われたら…。あなたはその理不尽さに怒りを覚えるだろう。そんな、だれが考えてもおかしな行為が、つい数十年ほど前までアメリカでは日常的に行われていた。それも法律の名によって、白人が黒人に強いていた。

1955年12月、アラバマ州モントゴメリーで、黒人女性、ローサ・パークが市内バスで白人男性に席を譲ることを拒否したために逮捕された。この出来事がきっかけとなって、黒人による市内バス・ボイコット運動が起こり、60年代に政治的、社会的パワーとして噴出する公民権運動高揚の発火点となった。このバス・ボイコット運動から26歳の青年牧師マルチン・ルーサー・キング・ジュニアが指導者として登場した。運動は急速に全米に広がり、63年には最高潮に達した。この年の8月、米国史上最大の25万人デモ、ワシントン大行進が実現し、キング牧師の有名な「私には夢がある」演説がアメリカ中の何百、何千万人の人々の心を奮い立たせた。

“I have a dream” by Martin Luther King, Jr.

I have a dream that one day this nation will rise up and live out the true meaning of its creed: “We hold these truths to be self-evident: that all men are created equal.”

I have a dream that one day on the red hills of Georgia the sons of former slaves and the sons of former slaveowners will be able to sit down together at a table of brotherhood.

I have a dream that one day even the state of Mississippi, a desert state, sweltering with the heat of injustice and oppression, will be transformed into an oasis of freedom and justice.

I have a dream that my four children will one day live in a nation where they will not be judged by the color of their skin but by the content of their character.

I have a dream today.

学習1 キング牧師の演説文を読もう。

討論1 アファーマティブ・アクションの是非について話し合ってみよう。

調査1 日本における反差別の闘いやアファーマティブ・アクションにはどのようなものがあるか調べてみよう。

アファーマティブ・アクション（積極的差別是正政策）

アファーマティブ・アクション（積極的差別是正政策）とは、女性、少数民族（黒人、ヒスパニック系、アジア系、アメリカ・インディアン）障害者、ベトナム戦争帰還兵に対して、雇用や入学などにおける、ある程度の優先権を与えるシステムである。

もともと白人男性が独占していた消防士、警官、その他の公務員職に女性やマイノリティーが応募しても、白人男性の試験官が今までと同じように採用する傾向が強く、女性やマイノリティーの雇用の実現が容易でないと明らかになったためにできた制度である。

1960年代にキング牧師の片腕として公民権運動を指導してきたジェシー・ジャクソン牧師は、「なぜ黒人はアファーマティブ・アクションを必要とするのか」と題した次のような文を1981年に発表している。

「スポーツ選手の例を使って説明したら理解してもらえるだろうか。二人の長距離ランナーが勝敗をかけてスタートを切った。二分後、審判員たちは、遅れをとっているランナーが足首に重い鉄玉をつけて走っていることに気がついた。審判員はレースを中断させて、両ランナーを止まった地点に留めたまま遅れをとっているランナーの鉄玉を取り除いた。そしてふたたび止まったその地点からスタートさせた。予想どおり、最初から鉄玉をつけないで走ったランナーがかなりの差をつけてゴールインした。

さて、このレースをフェアだと思う者がいるだろうか。もちろん、だれもがノーと答えるにちがいない。では、レースをストップした時点で鉄玉をつけていたランナーの遅れを取り戻すための何らかの処置が施されたとしたら、それを鉄玉をまったくつけずに走ったランナーに不公平だという者がいるだろうか。ノーである。

人種問題が入ってこないがゆえに、このランナーのケースだったら、だれにも納得がいくようだが、ことが人種問題となると、とたんに意見が分かれてしまう。現在は教育、公共施設利用、就職、住宅、政治の場での差別を禁止する法律があるではないか、という人もいるだろう。しかしそれら平等を保障する法律は、長年はめられてきた鉄玉を取り除く役割を果たしたにすぎない。鉄玉を除くだけではギャップは縮まらない。もし、このレースの最後のほうだけを観戦しただけなら、遅れをとっているランナーにギャップを埋める措置は、先を走っているランナーに対する差別だと思ってしまう。しかし、レースを最初から見ていたならば、遅れをとっているランナーへの措置は、公平で当然なことであることがわかるだろう。

(参考資料) キング牧師の指導した公民権運動

現在、アメリカでは政府の要職についている黒人は多い。民間でもそうだし、黒人の警察署長も珍しくない。30年前には考えられなかったことだ。その頃、特に南郡では、黒人は警察官になれなかったし、バスに乗るのも白人とは席が別だった。

1955年、歴史に残る黒人運動の第一歩となる事件がその町で起こった。黒人縫製工ローザ・パークが、バスで白人に席を譲らなくて逮捕されたのだ。不当な差別に爆発寸前になっていた黒人たちの怒りは頂点に達した。

ガンジーの非暴力闘争に深い共感を抱いていた26歳のキング牧師は、彼らに非暴力による整然とした抗議運動を呼びかけた。黒人がバスで差別されなくなるまでバスに乗らないで歩く、バス・ボイコットである。運動が始まると、大勢の黒人たちは朝早く起き、歩いて職場へ通った。雨の日も風の日も、1年後に勝利を迎えるまで、彼らはただ黙々と歩いた。歩くのが無理な人のため黒人タクシーを集めて用意してあった。キングがある老婦人に、「あなたはもう十分に歩きました。これからは車に乗ってください」といたわると、「足は疲れても、魂は安らぎを感じるんです。私は、私の子や孫のために歩きます」とその婦人はうれしそうに答えた。一方、バスはガラガラで走らなければならなくなり、市や警察はあらゆるいやがらせをした。キングの家に爆弾が投げこまれたり、不当逮捕されたりした。しかし、彼らのねばり強い闘いによって、ついにバスでの差別を撤廃させた。

モントゴメリーでのこの勝利は、長年差別に苦しめられてきた南部の黒人たちに、計り知れない勇気と希望を与えた。各地で黒人たちが立ち上がり、運動は南部全域に広がっていった。キングは南部キリスト教指導者会議を組織し、議長に推された。こうして全国的に展開する公民権運動の先頭に立ったのである。

1963年、ワシントンに結集した25万人の前での、キング牧師の「私には夢がある」の演説は、歴史に残る演説としても有名で、学校でも必ず教え、公民権とは何か、平等とは何かを考えさせる基本になっている。しかもこの集会に集まった人の4分の1は白人だったというから、彼の運動がいかに幅広い支持を得ていたかわかるだろう。この年はまたケネディ大統領が暗殺された年でもあったが、翌年ついに黒人の投票権を認める公民権法が成立。非暴力主義を貫いて、平等を達成した運動の指導者として、キング牧師はノーベル平和賞を受賞。彼は自分一人の力ではないと、賞金のほとんどを、運動の諸団体に寄附した。しかし黒人と平等になることを嫌う狂信的な白人もいた。

1968年4月4日、テネシー州のメンフィスの清掃組合のストライキの応援にきたキング牧師は、ホテルのテラスで彼らの一人が放った凶弾に倒れた。39歳の働き盛りであった。それから15年たって、アメリカはキング牧師の偉大な生涯そしてアメリカに正義をもたらした功績を称え、キング牧師の誕生日(1月15日)を記念して、1月の第3月曜日を国民の祝日にすることに決定した。(三谷章子 潮出版社「パンプキン」より)

“I Have a Dream” の続き (全文)

I have a dream that one day every valley shall be exalted, every hill and mountain shall be made low, the rough places will be made plain, and the crooked places will be made straight, and the glory of the Lord shall be revealed, and all flesh shall see it together. This is our hope. This is the faith with which I return to the South. With this faith we will be able to hew out of the mountain of despair a stone of hope. With this faith we will be able to transform the jangling discords of our nation into a beautiful symphony of brotherhood. With this faith we will be able to work together, to pray together, to struggle together, to go to jail together, to stand up for freedom together, knowing that we will be free one day.

This will be the day when all of God's children will be able to sing with a new meaning, “My country, 'tis of thee, sweet land of liberty, of thee I sing. Land where my fathers died, land of the pilgrim's pride, from every mountainside, let freedom ring.” And if America is to be a great nation, this must become true. So let freedom ring from the prodigious hilltops of New Hampshire. Let freedom ring from the mighty mountains of New York. Let freedom ring from the heightening Alleghenies of Pennsylvania! Let freedom ring from the snowcapped Rockies of Colorado! Let freedom ring from the curvaceous peaks of California! But not only that ; let freedom ring from Stone Mountain of Georgia! Let freedom ring from Lookout Mountain of Tennessee! Let freedom ring from every hill and every molehill of Mississippi. From every mountainside, let freedom ring.

When we let freedom ring, when we let it ring from every village and every hamlet, from every state and every city, we will be able to speed up that day when all of God's children, black men and white men, Jews and Gentiles, Protestants and Catholics, will be able to join hands and sing in the words of the old Negro spiritual, “Free at last! Free at last! Thank God Almighty, we are free at last!”